

労働と所得の分離ーベーシック・インカムー

★要約★

今日の論文は、現在の福祉政策における課題を解決するべく、全ての人々に対し普遍的に社会福祉給付を行うベーシック・インカム（以後、BI）を提案するものである。

I 小沢修司 『福祉社会と社会保障改革』 2002 1章・終章

「選別主義」で特徴付けられる現行の福祉政策においては、公衆のお世話になることは社会から切り離された存在であり、社会の落伍者ということを福祉受給者に強く意識させ、申請をためらわせてしまうという「スティグマ問題」や、所得を増やしても結局税金や社会保険料が増額されて手元に入る所得総額はほとんど増えない（あるいは減額）事態が生じることで勤労意欲を失い貧困から逃れられない「貧困の罠」、失業しても所得補助などで受け取る総額は働きに出ている時とほとんど変わらないので、就業意欲が失われるという「失業の罠」という克服すべき課題がある。性別分業の解消やハイテク化・情報化による雇用（賃労働）の減少の可能性といった社会的経済的变化からも戦後の「福祉国家」を見直し、新たな構想による所得保障の必要性が生じてきている。

そこで登場するのがBI構想である。BIの特徴としては

- ① 家族単位でなく個人単位で給付される
- ② 所得の有無に関わらず給付される
- ③ 現在及び将来の労働履行が要求されない

というものがあげられる。よって、

- ・ 性別分業に基づく核家族モデルへの束縛からの解放
- ・ 生活保障としての賃金の性格が変わるので、自立心の向上と個人の自主選択に基づく労働、文化活動の活発化
- ・ 労働市場の二重化が進む中で、不安定度が強まる労働賃金への依存からの解放
- ・ 「選別主義」に伴うスティグマや貧困と失業の罠の問題を解決
- ・ 資力調査のためのコスト削減

が可能となる。

このようなBI構想の日本における実現可能性としては、結論から述べると数字的にそんなに無理することなく導入できると考えられる。現行の生活保護の水準を参考に一人当たり月8万円（年間96万円）をBIに想定し、日本の総人口をかけると、年間115兆2千億円の財源が必要となる。年金や生活保護の給付など社会保障給付費のうちの現金給付分(45兆5千億、99年)は全てBIに置き換え、給与所得の所得控除は全廃され比例課税されると、所得税率50%程度の所得税率で財源の調達が可能である。

II T. フィッツパトリック 『自由と保障 ベーシックインカム論争』 2005 第4章

B I の長所として、プライバシーの尊重、スティグマ問題や貧困と失業の罨から解放すること、社会的分裂を打破するといった「社会的公正の増進」と、資力調査のための行政コストを削減できること、労働市場を柔軟化すること、税と給付をうまく統合させることといった「効率」の価値がある。

一方でその長所に対して、B I に対する最大の批判は、誰かが生産のために払った努力にただ乗りする者の存在を許し、経済的な意味での持続可能性に脅威を与えること（フリーライダー）である。

しかし、フリーライダーについては、B I 導入による所得保障、生活保障によって幅広い生き方ができる労働市場の柔軟化がなされた自由社会の証しだと考えることができるという反論が可能であるとして、B I 構想にはもはや否定しきれない重要な面があるとしている。

★引用★

「いうまでもなく、ベーシック・インカム構想は、所得保障、現金給付に限った議論であり、今日に至る社会保障制度の発展の中で重要な位置を占めている医療や福祉サービス、現物給付についての見当はまったく視野の中に入っては来ないという限界が存在している。社会保障すなわち所得保障という問題の立て方自体優れてイギリス的な捉え方を反映しているといえよう。したがって、最低所得保障構想としてのベーシック・インカム構想だけでは、これからの社会保障制度全体の総合的なあり方についての問題提起は望めないことは明らかであろう。

とはいえ、これまで見てきたように、負の所得税、参加所得、社会配当など、論者の政治的思想的スタンスによってさまざまな変化を示しつつ、今日の戦後「福祉国家」体制化での所得保障のあり方を根本的に問い直す構想としては、ベーシック・インカム構想の投げかける波紋はきわめて大きいものがあるといわなければならない。」

(小沢 P129～P130)

B I には、限界もあると考えられるが、これからの福祉社会構想の創造的な展開には必要なものであると筆者は述べている。B I 構想が実現されれば、生活保障の最後の砦としてのセイフティネットという考え方が個々人の豊かな自己実現に向けた発達のスプリングボードに変わることになり、生活の経済基盤が個々人に保障されるので、自由な自己決定が可能となるのである。さらに、戦後の福祉国家下での支配的な性別分業にも見られる、極めてジェンダーバイアスの強い税制や社会保障制度の呪縛から解き放たれ、そして今日では活動が評価されないため十分な発展が望めない分野が発達することも期待できよう。

さらに、労働賃金へ依存した生活から人々を解放し、これまでの所得保障につき物であった資力調査に伴うスティグマや「失業と貧困の罟」から解放されることで、労働のインセンティビティとフレキシビリティが高まることになるだろう。

ホワイトは、フリーライダーを必要悪であり、共同社会を不可避免的に蝕む病の徴候であると考えているが、私は、フリーライダーを自由な社会の証しだと考えている。…

…ホワイトは平等主義的な互酬性にコミットしており、この文脈のなかに無修正のベーシック・インカムを導入しようとするが、私はむしろこの文脈を修正したい。基本的で無条件の権利を導入することによって、平等な自由主義社会のなかに協同的で互酬的な活動が次々に行われるような空間を築きたいのである。(フィッツパトリック p 78)

BIの最大の批判である、フリーライダーの問題についての反論として、ホワイトの説と比較しながら自説を展開し、BIの価値を擁護している。

まずホワイトは、BIによってフリーライダーが生まれること、及びフリーライダーの存在が好ましくないことを肯定している。しかし、フリーライダーが存在しない社会を築くことを目指すよりも、BIを導入することによって個性や社会の多様性という大きな価値が達成されるので、フリーライダーを受け入れるべき代償であると考えている。

それに対し筆者は、BIによってフリーライダーの定義を限定し、今までの非BI社会における曖昧な定義によるフリーライダーの、幅広い活動を目指すことができるとしている。

★定式化★

①BI構想には、労働と所得を切り離すという考えがあるが、実際に切り離して考えることができるのだろうか。例えば、大金を手にして一生の生活が保証される（宝くじ当選等）と、どのような生き方を選ぶだろうか。

②「働く価値」が「生きている価値」であると認識している人もいると思うが、果たして本当にそうであろうか。生きる価値とは働くこと以外にはないのだろうか。

例えば、労働と所得がBIによって切り離されることで、「働く価値」＝「生きる価値」というプレッシャーから解放され、働く気のあるニートの人たちは、その一歩がもっと踏み出しやすくなるのではないだろうか。

③無償の家事労働や文化活動やボランティア等を広く含めた社会活動の中で、現在では経済生産性の高い活動に対して高い報酬という形で評価しているが、B I 構想によって達成される価値の一つとして、労働による所得への依存から解き放ち、幅広い生き方、労働のあり方が展望されるとされている。

(a) 果たして、B I によって文化活動・ボランティアは発達するのだろうか？現在の選別主義的な税制の優遇措置等によって同等あるいはより発達・保護を果たせるのではないだろうか。

(b) 現在の日本では学歴重視と終身雇用という、およそ一律の目指すべきとされる価値が崩れ、多様性が実現されてきている反面、自己破産の増加やニートの存在など、無秩序・無責任さの現れとも考えられる問題が生じている。果たして、「多様な価値観」はそれほど重要なものだろうか。

④自由主義の考えからB I は批判も擁護もできる。批判としては、B I は自由な労働市場によって得た所得を「怠け者」も含めて平等に再分配をすることが望ましくないとし、擁護としては、労働市場の柔軟化によって幅広い生き方が可能となり、実質的な自由が実現できるとする。では、二つの自由のうちどちらを重視すれば、社会がより発展するだろうか。